

第59回 中高校生の吃音のつどい(Enjoy music!)

6月23日(日)、小学生9人、中学生9人、高校生4人、兄弟姉妹4人、ご両親23人、スタッフ34人の計83名が参加。千代田小学校ことばの教室及び音楽室にて開催。僕は今回、リーダーでした。前回のリーダーから久しぶりになります。ついでにリーダーは3回目になります。合唱の司会は曲名だけ言っても面白くないと思い、少し曲の説明も付け足すことにしました。また全力で歌いました。中でも印象的だったのは、「すてきな友達」です。案外、手話を覚えることが出来たので。歌詞も良い曲で、励まされる歌だと思います。ミニコンサートは皆さん素晴らしい演奏でした。Y.Yさん(小6C君のお母さん)の演奏はとても迫力のあるものでした。印象的だったのは松本直大さんの「Etude of the sun」です。穏やかなメロディに癒されました。話し合いではとある作戦をもって向かいました。それは、スタッフ気分で遠慮していたら何も話せないのでは、参加者気分でいこうという作戦です。結果、自分の意見を言うことができ、自分では成功だったと思います。全体的に良い集いだったと思います。スタッフの皆さん、ウォーミングアップなど担当してくれたM.Oさん(中2Sさん、高1K君のお母さん)、Y.Yさん、来てくれた参加者の皆さんありがとうございました。輝かしいコンサートプログラムは下記。(リーダー;松崎圭祐、灰谷知純、川口亮太)

- ・「トランペット協奏曲第1楽章、ハイドン」 トランペット K.M(高3)、ピアノ M.O
- ・「クシコスポスト、ネッケ」 ピアノ S.K(中1)、マリンバ Y.Y
- ・「パール・ギュント第一組曲より朝、グリーグ」 ピアノ T.K(小5)
- ・「エリーゼのために、ベートーベン」 ピアノ M.W(中2)
- ・「タイタニック」 ピアノ 原空留未(スタッフ、大1)
- ・「アシタカせっ記」 ギター S.N(高1)&松本直大(スタッフ)
- ・「Etude of the sun」 ギター 松本直大(スタッフ)
- ・「剣の舞、ハチャトリアン」「チャルダッシュ、モンティ」 マリンバ Y.Y、ピアノ M.O
- ・「学園天国」 トランペット K.M、アルトサックス 小林桃子(スタッフ、大1)
- 、ボーカル A 灰谷知純、原空留未、松崎圭祐、土器菌朋子
- ボーカル B 川口亮太、金野加慧、土屋初希、菊地香央莉、ピアノ伴奏 M.O、コンガ Y.Y

K.Mさん(高3)

一人で人前に出て発表させていただくのはとても久々で、楽しい気持ちで演奏が出来ました。楽器を持っても、喋る時と同じように、やはり緊張は大きいですが、皆さんが笑顔で、興味を持って聴いて下さっていたように見えて嬉しかったです。

伴奏をして下さった O さんをはじめ、一緒に演奏し、一緒に歌ったみなさん、ありがとうございました。今回初めてお話した方が沢山いて、音楽は人を繋げる素敵なツールであり、話すことに並ぶ素晴らしい表現方法だと改めて実感しました。

個人的な感想になってしまいましたが、自分に自信が持てるとても良い会だったと思います。またみんなと一緒に音楽をやり、繋がりました。ありがとうございました。

N.Iさん(中1男子のお母さん)

私は、小学校、中学校、高校、大学時代は教育実習で、毎年必ず合唱の伴奏をしていて、歌うより、伴奏をする方が大好きでした。その後、機会がなくて、本当に久しぶりに昨日のつどいで伴奏させていただいて、しかも、私の大好きな歌(「世界に一つだけの花」)を皆さんが自分の伴奏に合わせて歌ってくれて、とても楽しい時間を過ごすことが出

しているようです。よろしくお願いいたします。

娘はきこえとことば教室(目黒区東根小)や中高生のつどいに参加させていただくことができて、とても前向きになりました。去年は学校の課題で与えられた、人権を題材にした作文で自分の吃音のことをテーマに選び書くことができました。学校から応募していただき、目黒区の区長賞をいただくことができました。表彰式に行き、区長さんから「どんな気持ちでこの作品を書きましたか？」と聞かれ「自分の病気のことをみんなに知ってもらいたいと思って書きました」と答えていました。我が子ながら、ほんとうに前向きになってくれたと感動しました。辛いこともたくさんあると思いますが、仲間で助け合い強く強く生きていってほしいと思います。

松本 なおひろ 直大（スタッフ・中学生 G 担当）

参加者のS.Nさん(高1)とギターのデュオを組んで演奏しました。参加者の方と準備段階から一緒に何かをやるというのは僕にとって初めての経験で、当日に向けたスタジオでの練習から本番まで全てが新鮮でとても良い経験になりました。Nさんも勇気出してやってみて良かったと本番後に言ってくれて、本当にやって良かったなと思いました。長い間スタッフをやってきて今更な感もあるので、僕自身、やっとなんと参加者の子と仲良くなったなという気がしているので、忙しい中だったのですが、今回参加することが出来て本当に良かったです。これは今回のつどいで言葉以外の部分で音楽を通して通じ合えたからじゃないかなと僕は思っています。音楽のつどいには他のつどいにはない魅力があると思うので、続けていけるといいなと思います。

川口 亮太(スタッフ・ご両親 G 担当)

久し振りにご両親グループを担当した。今回の話し合いで、僕はある二つの言葉が印象に残った。Nさんが発せられた「吃音がよくなる」という言葉と、M.Nさんが発せられた「最後はそいつの人柄」という言葉である。

Nさんが発した「吃音がよくなる」という言葉は、いわゆる「吃音を治す」という意味なのだろう。そこで

みんなで歌うのって楽しいですねー。とても気持ち良かったです。全部知っている曲ばかりで楽しく歌えました。みんな色々な特技を持っていて素晴らしいですね。娘もピアノを披露させていただき感謝してます。ありがとうございました。

話し合いもお兄さん達に、色々話を聞くことができて良かったです。話したくないこともあったでしょうが、辛い経験なども話して下さってその勇氣にも感動しました。毎回毎回思うことですが、娘の将来も明るいと思います。

毎回楽しい企画を計画してくださり感謝しています。ありがとうございます。夏のキャンプも楽しみに

思ったことなのだが、吃音がよくなったところで自分の見える世界というものはどれだけ変わるのだろうか。

先日の勉強会でもやったが、吃音は色やにおいて例えることができる(ここでは色に例える)。「吃音がよくなる」ということは、言ってしまうと吃音の色を消してしまうことである。消したところで、「自分自身の絵」はよくなるものだろうか。

吃音の色というものは、やはり傍からみてそんないい色ではないのだろう。でも色というものは、演出しだいどんな色でも魅力的な色にすることができる。その演出というものは、言うなれば「その人柄」なんだと思う。

僕は今まで、人間関係や将来への不安、社会とのかかわりなど吃音のことでたくさん悩んできた。でも、これらの悩みは吃音者じゃなくても誰もが抱える悩みであり、考え方によれば僕の場合たまたまその悩みに吃音が絡んできただけである。これらの悩みは吃音の有る無しで解決できるほど単純ではない。吃音よりも、「その人柄」の方が重要になってくるのではないだろうか。

いつかの作文でも書いたが、僕は、吃音と吃音者の現状についてしっかりと理解している人であれば、そこから先は何を目指そうとその人の自由という考えを持っている。吃音の色を消そうが消さまいかはその人の判断次第でいいと思っている。でも僕は、せつかく吃音の色を持って生まれてきたのだから、その色を上手く生かした「自分自身の絵」を描きたいと思う。

体験談 K.Kさん(スタッフ)

スタッフとしてつどいに参加した私は吃音を受け入れていこう、と思えるようになりました。今まで、私はとにかくマイナス思考でどうせ吃音だからできない…、という考えばかりしていました。ところが、このつどいに参加してその考えが変わりました。自分ってなんだっただろう。吃音にとらわれてばかりで馬鹿みたい…と反省しました(笑)。(中略)

今、私は就職活動をしているのですが…この間一次面接がありました。そこでの面接では頭が真っ白になり、自己PRすらままならない状態でした(笑)。吃音の難発で話せないのではなくて、本当

に何を話したらいいのかわからない状態で、言葉が出ない状態でした。やっと話し出せたかと思ったら、変な敬語を使ってしまったり、噛んだり、どもったりと…散々でした。

面接をする前に履歴書を書いて持っていきました。履歴書を書く前はどんな自己PR書こうかなあ。うーん。自分の特徴ってなんだろー。難しいなあ。そんなの自分ではわからないしなあと思っていました。いざ、履歴書を書こうとすると…やはり書けません。じゃあまず自分の特徴を書いてみようと思い、書き出しました。すると吃音のことしか出てこないのです…。うーん…困った…、となりました。明日までに持っていかなければならない…。もう特徴なんてないよ〜。先のことばかり考えて、めんどくさがり屋で神経質で…何書けばいいんだろう、と考えました。悩みに悩んだ挙句、やっぱり吃音無しでは私は語れない!と思って履歴書に書いてしまいました。それがマイナスになることもあると思います。もしかしたらそれで落とされることがあるかもしれない…。まあその時はその時でいいか。別に特別行きたいところでもないし…と思いそのまま提出しました。

それから、面接になった訳ですが、面接では吃音の話ばかりでした。医療法人を受けたのですが、面接官の人に吃音だったなら小学生の時いじめられたんですよね? 辛かったでしょう。そんな経験もあるから人の役に立ちたいのよね…? と言われ、茫然としました。(中略)

するとすぐに他の面接官からの質問が来ました。質問の内容とは「おそらく、話す時に言いたいことで頭が一杯になっちゃうんでしょうね。吃音を治すためにトレーニングをやらないのですか?」というものです。正直、私はトレーニングで治るようなものだとは思っていないので、『え?』と思いました。『トレーニングで治るんだったら吃音者いないじゃん。何言ってるの?』と。そして、『私、話す時に頭一杯になってないし』と思いました。なので『トレーニングで治るものだとは思わないですし、受け入れてます』とだけ話しておきました。吃音という言葉を知っていてもなかなかその中身は認知されていないんだなあ、と感じました。その面接になんのために行ったのか自分自身でも分からなくなりました。なんか、就職する気で行ったんじゃないかと私の吃音はこ

うです！みたいなアピールをして終わったというか…。ある意味でいい経験だったのかなあ…、なんて思ってます。

もっと認知度高くならないかなあ、と思いました。そんな時に卒論のテーマを考えなさいとゼミの先生に言われて…。去年のゼミでは進化心理学視点からみた男女関係についてレポートを書いたのですが、あまりしっくりこなくて困ってました。私のゼミの先生は社会言語学、ジェンダー専門なんですが、先生と相談して吃音を題材にした卒論を書くことに決まりました。5月3日のミーティング(中高校生のつどいスタッフの…)では『何を専攻してるの?』と聞かれ、答えられなくて私4年生までで何やってきたんだろう。と自分でも分からずじまいでした。(笑)まだ卒論の方は相談段階で詳しい研究はしていませんが、とても楽しみにしています。

こんな感じで、つい半年前まで吃音を受け入れることができなかった私ですが卒論のテーマに吃音を取り入れ、発表することにも抵抗がなくなりました。私、この半年で変わったなと自分でも思います。

後記

◆上田紀行「生きる意味(岩波新書)」

スタッフ勉強会で使ったものです。第2章「かけがえのなさ」の喪失 1.「透明な存在」の呪縛(P.24～29)
「透明な存在」は、生きていく上で大きな問題を抱えている。自分の存在感を感じることができないということだ。自分がここににいるという実感が得られないのだ。みんなが見ているのは、透明化した自分の仮面である。本当の自分を見せたら嫌われる。だから「受け入れられやすい」自分を作り上げようとする。しかし、常に「仮面」をまとわなければならない自分、(後略)」←読書お勧めします

♣「世界に一つだけのコンサート」♣

吃音が縁で集えた仲間による手作りコンサート。M.Oさん、3度にわたる我々との練習(そのうち2度はご自宅にお邪魔し…ご主人のご協力もいただき)にお付き合いくださり、ありがとうございました。

直前ドタキャン等準備はやさしくないですが…、ライブの魅力は、それをはるかに上回る。ここだけにしかない味で。

●目黒区区長賞の作文は、昨年の本つどいのサマー

キャンプ作文教室で、M.Wさんが書かれた作文「私の相棒」を加筆されたものだそうです。すばらしい！ただ、病気と言うより、「ことばがどもること」や「吃音」と直接的に言う方が良いかも。一生付き合うものが病気…というのはしんどいだろうし、実はこの病気、有ってハンデいだだけるものでもなく…。有っても無くとも、同じ条件で生きていく。そして病気と片づけるのには、とても惜しいすばらしいものかもしれませんし。

(つどい代表 佐藤隆治)

